

## 美しき悲劇 — 「曠野」に見る堀辰雄の方法—

高橋 秀 晴

### 1

近代作家が古典に取り組む基本的な姿勢として、設定のみを原典から借用し主題も内容も完全に近代小説化してしまうものと、近代小説としての条件を必要最小限に留め可能な限り原典を大切にしようとするものが挙げられる。前者は、芥川龍之介に代表されるような、作者が近代という位置から動かずに古典を引き寄せる態度、と換言できるだろう。対して後者は、作者が古典世界の中に歩み寄り一体化しようとする態度、と言い換え得る。「曠野」の作者である堀辰雄は、後者の態度をとる典型的作家と考えてよい。

以下、堀辰雄が、換骨奪胎の刃を振り翳すことなく、素手でそっと埃を払うように古の物語を生き返らせた手法に注目しつつ、「曠野」が表現している諸相について考察してゆく。

### 2

「曠野」が「今昔物語集・卷第三十・中務大輔娘、成<sub>レ</sub>近江郡司、婢語第四」に拠っていることは論を待たない。<sup>(1)</sup> 堀の施したアレンジは、まずタイトル。ストーリーを要約したものから抽象度の高いものへと変更されている。「曠」という漢字には、「空しい」という原義があることも記憶しておきたい。

タイトルの袖に置かれた「忘れぬる君はなかなかつらからでいままで生ける身をぞ恨むる拾遺集」も作者による添加であるが、これは、

初出『改造』(1941年)にはあるものの、養徳社刊『曠野』(1944年)、養徳叢書20『曠野抄』(1945年)では省略され、文芸春秋選書19『あひびき』(1949年)から復活する、という経緯を持っている。「今昔物語」に「拾遺集」を合わせるという破調、また、読みが限定されるのではという懸念から揺れはしたものの、結局、破調によって王朝空間を自由に展開しやすくなること、「女」の境涯が照射されるという読みの焦点化効果、といった理由から、初出通りに落ち着いたものと推測される。

プロットそのものは原典にほぼ一致しているが、ポイントとなるのは、「女」が「男」の前に我が身を晒すことができなくなってしまった部分の加筆である。二人が以前の間柄に戻り得る唯一の機会が「女」の判断によって潰え、「女」は、生きるよすがであった「待つこと」さえもできなくなってしまう。「女」が、「みじめな姿」を見られるのが「急に空怖ろしくなった」という理由から身を隠した設定は、後の「婢」としての再会がいかに耐え難いものとなるかを暗示する伏線となっている一方、〈会おうとして会えなかった男〉にとっては〈会えないこと〉自体が美しい思い出となり、〈会えたのにあわなかった女〉にとっては「すべて」を失うことになる、という図式は、悲劇性を際立たせる伏線となっている。

この場面は、

男の歩み去つた山吹の茂みの上には、まだ蜘蛛の網が破れたままいくすぢか垂れ下がつて

夕月に光って見えた。女はその儘荒らな板敷のうへにいつまでも泣き伏してゐた……。

と結ばれているが、「伐り倒された松」「草」「蓬」「葎」などの小道具と響き合って、庭園が〈曠野〉化してゆく様とそこに浮かび上がる滅びゆくものの美しさとが見事に描かれている。「山吹」は、実らぬ恋の象徴として「万葉集」に歌われている花であり、また、「山吹の立ちよそひたる山清水汲みにゆかめど道の知らなく」という歌が、「黒髪山」(1941年7月)で扱われ、且つ「古典ノオト」にもメモされていることから見て、〈別れ〉と〈挽歌〉の意味を込めて意図的に配置された可能性が高い。

次に、「郡司の息子」が「女」を見初めるところについてだが、原典では以下のようになっている。

「徒然ナルニ女ノ童部求メテ得サセヨ」ト云ケレバ、尼、「我レハ年老テ行モ不為ネバ、女ノ童部ノ有ラム方モ不知ズ。然テ此ノ殿ニコソ、糸厳氣ニ御スル姫君ハ只独リ難有気ニテ御ヌレ」

対して「曠野」では、偶々「女」を垣間見た「郡司の息子」が、「目を赫やかせながら」「あれはどなたなのですか」と「尼」に尋ね、「尼」は、「見つけられてしまつては為方がないやうに」「女」の境涯を話すことになっている。また、「女」を伴って近江へ下った際の、本妻の「極ク妬ミ唄ケレバ」という反応は消去され、エピローグの、

男ノ心ノ無カリケル也。其ノ事ヲ不顯サズシテ只可養育カリケル事ヲ、トゾ思ユル。

此ノ事、女死テ後ノ有様ハ不知ズトナム語り伝ヘタルトヤ。

という説話臭も、綺麗に削除されている。

堀辰雄は原典のプロットを大切にしながらも、そのプロットによって構築し得る抽象観念をタイトル化した。そして「拾遺集」の歌によって

原典の時代的制約から離脱し、新しい焦点を拵えた。また、「女」の不幸をより鮮やかに照らし出すための出来事や伏線を設けつつ、美しさを疎外する要素をさり気なく取り去ったのである。

### 3

このようにして、「中務大輔娘、成近江郡司婢語」は、より美しい悲劇となって蘇った。〈美しさ〉と〈悲しさ〉の各々が強調され共鳴するメカニズムを得たのである。その結果として隠し絵のように映し出されるものは、人間の儂さに他ならない。

悲劇の原因を作中人物の内に見出すことはできない。「女」が「男」を去らせたこと、再会の機会を自ら捨てたことは、「女」の健気さの表れとして描かれているし、「郡司の息子」へ身を任せてしまい、結果的に「婢」となって「行きずりの男」の前へ出るまでの過程も、偶然性を織り込んだ一本道として設定されている。「女」の転落は、誠実な生き方の上に生じた止むを得ない事実として提示されているのである。

「男」の方はどうか。「或兵衛佐」として登場するこの「男」は、「ふた親の心になつた」「何もかもよく出来た人柄」であった。「女」の家を去ること自体は、通い婚という制度上特に咎められるべき行動ではないし、その後訪れなかったのは、「伊予の守の女」やその家族を裏切らないという「心のみめやかさ」に基づいたものとして極めて好意的に説明されている。

「郡司の息子」についても、純粹な恋情から「女」を求めさせているし、「婢」とするに際しての「おもてむき婢」として伴れ戻らなければならなかつた。」という言い回しにやはり語り手の好意が認められる。

つまり、誰の所為でもなく美しい悲劇は進行してゆくのだ。この設定は、〈美しさ〉と〈悲しさ〉を研ぎ澄ますと同時に、人間の無力さを照らし出すものである。自らに降りかかる何段階かの不幸に対して、「女」は、煩悶したり、耐えたり、諦めたりしてみた。小さな決心を試みたり、抗うことを試してみることもした。しかし、それらは悉く水泡に帰し、「運命」に

作用を及ぼす力にはなり得なかったのである。そして「女」は、自分の来し方、さらにはその延長線上に潜む（したがって本人には意識されなかったかもしれない）人間存在の儂さを、「いぶかしさうに見つめ」て死んでゆくのである。<sup>(2)</sup>

「女」の人生は〈曠野〉だった。のみならず、「この世で自分のめぐりあふことの出来た唯一の為合せ」が何であったかを悟った瞬間にそれを失ってしまった「男」の人生もまた〈曠野〉に他ならない。そして彼らを描いた堀辰雄は勿論、共感する読者の心中にも〈曠野〉は広がっているのだろう。

#### 4

芥川龍之介、松村みね子の影響下に出発した堀辰雄の古典傾倒は、保田與重郎から受けた触発、<sup>(3)</sup> プルーストやリルケを知るに及んで得た、芸術の源泉が東西軌を一にしているという認識<sup>(4)</sup>を経て着実に育っていった。古代・国文学の発生から近世・芭蕉七部集までをカバーする「古典ノオト」は、堀の思い入れを物語る。

一方、関東大震災による母志気の死（1923年）、師芥川の自殺（1927年）、婚約者矢野綾子の病死（1935年）、養父上条松吉の病死（1938年）、愛弟子立原道造の病死（1939年）という喪失体験に加えて、彼自身が常に死と対峙しながら宿痾と闘い続けていることも見落としてはならない事実である。幾多の〈悲しさ〉や〈儂さ〉、それ故の〈美しさ〉を越えた後の小さな安定<sup>(5)</sup>の中でこそ「曠野」は生まれたと言えるだろう。

自らが背負ってきた文学体験・人生体験と大和路の風景に潜む王朝世界とが感応した結果、堀辰雄は筆を執り、太平洋戦争開戦の一週間前、1941年12月1日に「曠野」を静かに世に出したのである。

#### 注

- (1) ただし、「これと同じやうな話が伊勢物語にもあり、ともどもに私の心を惹いてゐた。」（『堀辰雄作品集第六・花を持

てる女』あとがき）という発言は無視できない。「同じやうな話」と見なし得るのは、「伊勢物語」の六十段と六十二段である。何れも、かつての夫婦が、夫は出世し妻は落ちぶれて再会する設定において一致しているのだが、細部を比較検討してみるならば、やはり「今昔物語」との近似には及ばない。

- (2) 「女」の最期に関しては、愛した男に抱擁されて死ぬ状況を重視して、

最後に恋人の手の中に周り還つて息を引き取る時に、純粹裸形の幸福がいやはての落日の光のやうに彼女の全生涯を一瞬顧み照し、その時この幸福は絶対のものとなるのである。（河上徹太郎『堀辰雄一思ひ出にまつはる文学論一』、「文芸」1953年8月）

惜しげもなく自分を与えたその純真さのうちに、運命は知らず識らず祝福を用意したのだ。（吉田精一『堀辰雄と王朝女流日記』、『現代文学と古典』、至文堂、1961年10月）とする見解が主流であるが、「いぶかしさうな」「女」の眼差しの説明がつかなくなること、全体のトーンである〈美しさ〉・〈悲しさ〉・〈儂さ〉の結晶にひびが入ってしまうこと、という二つの理由から、採らない。

- (3) 「保田與重郎君がこの日記への愛に就いて語った熱意のある一文に接し、私は何かその日頃の自分を悔いるやうな心もちにさへなつてそれを感動しながら読んだものだ。」（「姨捨記」）という言及がある。

- (4) 「伊勢物語など」参照。

- (5) この時期、堀辰雄は症状も好転し、多恵子夫人と比較的落ち着いた日々を送っていた。